

## 千年の祈りと敦煌、中日両国の歴史的な共鳴

宋家宝

古代シルクロードの中心として敦煌は、東洋と西洋の最初の文化交流を象徴し、千百年間の東西文明の融合を無言に世間の人に示している。その中、天竺からの仏教はまず漢朝に輸入、その後飛鳥時代の日本に布教された。一方、千百年の中日交流に連れられるのは『般若心経』などの文献だけでなく、更に文化や芸術へ考え及び審美も共通していると思う。そして敦煌への印象の中では、一番深いのは「敦煌飛天図」のような仏教美術だけでなく、日本の音楽家の姫神に作られた『千年の祈り』も非常に印象している。

中国と日本の共通の宗教的および芸術的概念は民族の壁と何千年もの時空を越え、山川万里を隔つれども、一見無関係な日本の「音楽」と中国の「敦煌文化」を密接に結びつけてきた。中国留学生にとって最も感動的なのは、日本の友人と談話の過程で、漢字の発音や構造が変わったが、めったに見かけない文字の意味も理解できるということである。その背後にある意味は何千年もの間に受け継がれていても変わっていない。もし月日が逆流することができれば、歴史長い流れの中で両国間の学生は、伝統な服を着て、春の日、夏の夜、秋の山、冬の月に対座して、時を忘れ長談するかもしれない。時間の経過とともに、両国間の文化の違いはますます明らかになるが、芸術への解釈や詩への理解で、更に儒教などの哲学思想への認識は互いに共鳴することができる。私は春秋戦国の歴史に夢中になっている。特に諸子百家における儒家思想と楚文化の詩と神楽歌が興味深い。また、

大和文明の一つの発祥地としての肥後国である熊本に留学できて、とても幸運であると思う。このような歴史的共鳴は、肥後文化をより深く理解することでますます強くなる。

この中で、儒者としての横井小楠の思想が最も感心されていた。

1840年に清がアヘン戦争で英に敗北された。その一方、1853年にはペリー来航すると、日本も西欧列強と不平等条約を結ばれらるを得ない。こんな民族の未来を決める緊急的な時期に、横井小楠はまだ儒学の「義」、「道」の準則を堅持し、資本の本源的蓄積のように外国を殖民することを反対した一方、「理想によって力を超える」という信念を信じ込んだ。彼は堅持したのは自分の君子人格だけではなく、更に日本を「道」及び「義」を持つ「君子の国」に努力した。

金峰山の頂上に登ったら、熊本や有明海が見える。こんな所は人が落ち着けて、学んだ知識も吟味できる。

長い歳月の流れで、中日関係はお互いに師弟関係だと言われた。しかしながら、私から見ると、「汝為舞姫、吾為琴師」の如し。中日関係は「舞姫」と「琴師」の関係に似て、旋律が流れるとともにひらひらと舞う。無言のうちに心が互いに通じ合うからこそ、それは両国間「以心伝心」で、深く情誼である。